
ほろにがバレンタイン。

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほろにがバレンタイン。

【Nコード】

N5909L

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

2人が解毒剤を手にすることを諦め、『江戸川コナン』『灰原哀』として生きることを決めてから、早4年が経過した。小学校最後のバレンタイン。コナンに思いを寄せている歩美が決意したことは――Candlelight閉鎖により移行作品。またあした・・・とはまた違う設定です。小学6年生の話で、二人が江戸川コナン、灰原哀として生きる決意をした後の話です。淡い淡い恋の話。

『バレンタインデーは、女の子がチョコに愛の勇気をもらって大切な思い出を作る日・・・』

だからチョコは甘くて苦いんだって』

5年前。

学校が終わり、いつものみんなで商店街を歩いていたとき、バレンタインの話になって。

そんな中、あの子が頬を真っ赤にして言った言葉。

彼の癖みと、私の血みどろな話で、黒く濁った空気を、一瞬のうちにピンク色に変えた言葉。

今になって、また、あの子の声が頭に浮かぶ。

あのころは、まさか自分がこの日に誰かにチョコをあげたいだなんて、少しも思わなかった。

なのに、どうしてだろう。

今は・・・。

「哀ちゃん、ツノが立つってこれくらい？これくらいだったらちやんと膨らむかなあ？」

「・・・うん、いいんじゃないかしら」

今日は2月12日。学校から帰り、ランドセルを置くとすぐに吉田さんの家に行き、明後日に控えるバレンタイン のためのチョコレート作りが始まる。

あの当時、あの日の私の心を無意識のうちに動かしてくれたその言葉を母親に教えてもらい、また、父親には『誰かにチョコをあげるにはまだ早い』と言われたというその彼女。去年、一昨年は、母親と一緒にチョコレートを作って、彼、だけでもなく、少年探偵団の彼らだけでもなく、私や蘭さん、それにあの鈴木財閥の彼女や佐藤刑事などの警視庁の人たちなど、沢山の人たちに配っていた。もちろん、私たち以外の人たちには1つずつだったけれど、みんなとっても喜んでいて。そしてそれを配っているときの吉田さんもまた嬉しそうに笑っていた。

そんな彼女が、今年は特別なものを作りたいと言ったのが、今月の初め。

登校時、彼らとは少し離れて一人歩いているときに、彼女に呼び

止められて、そう告白された。

あのときのそれとも違う、顔面林檎のように真っ赤に赤らめて。

『哀ちゃん、チョコレートケーキの作り方って知ってる？コナンくんに、食べてもらいたいんだ』

それは、彼だけにしかあげないという、『特別な』もの。

他の人はどうするの？と聞いたら、探偵団にだけはチョコレートはちゃんと作ってあげるよ、と笑った。

もちろん、哀ちゃんにもね、と付け足して。

『去年までの2年間はお母さんと一緒にバレンタインチョコを作った。だけど、今回は哀ちゃんと2人で作りたいんだ』

そうも言った。

小学6年生になった彼女は幼女ではなく、少女からやがて『女性』になる準備をしているときで、可愛らしくもあり、美しくも感じることもある。まだ12歳だというのに。そのころの自分はこんなにイキイキとしていたかしら、なんて考えて、すぐに打ち消した。

イキイキとしているわけがなかった。

――自分はその当時、まだ組織の施設にいた真っ只中だったから。

組織が崩壊して早3年。本当に平和ボケしているのね、と少し情けなくなる。あんなに辛かった、苦しくて死にたくて逃げ出したくてたまらなかったあのときをすっかり忘れかけているだなんて。

彼なら。もし、この場に彼がいたら。

・・・彼なら、きつと『よかったじゃねーか』なんて笑うに決ま

ってるけど。

「……哀ちゃん？」

ハツと我に返る。チョコレートクリームのいっぱい入ったケーキの種はガラスの型スレスレまで広がり、それをミトンの手でしっかりと掴んだ吉田さんは、きょとん、とした表情で私を見ていた。

「どうしたの？ なんだかボーっとして」

「あ、そう、そうかしら？」

「そうだよー。……でも、なんだか嬉しそうだね。なにかいいことでも考えてた？」

「……え？」

何を見当違いなことを言っているのかしら、なんて内心苦笑した。嬉しいことなんて考えているはずがない。

だって、今さっきまで組織のいた時代を思い出していたのだ、そしてそれを忘れていた自分を情けないとも。

「だって……」

吉田さんの指先が私の口端と、目元とを順々に、ツンと押した。軽く、まあるい爪が刺さる。

「口角が緩んだ。それから、目元も下がってる。何かいいこと考えてた証拠だよ。なあに、誰のこと考えてたの？」

「……えっ、誰のこと、って……？」

一瞬、ギクリとして私は言葉を失くした。きつと、今、すごい顔をしている。すごい顔で、吉田さんを見つめている。

だけど、ポーカーフェイスなんて作れる余裕も、今の自分にはないこと、頭のどこかで解っていた。

「光彦くん？それとも、川崎くん？浩介くん？哀ちゃん、結構クラスの男子に人気だもんねえ・・・！最近、なんだか話してるの、見てて楽しそうだし。いい感じだと思ってたんだあ」

クスクス笑う吉田さんに、私も無理矢理笑みを作った。笑うしかなかった。

好きとかそういうのじゃない。

けれど、いいことあったの？誰のこと考えてたの？といわれたとき、最後に考えていた彼の顔がポツと浮かんで。

もちろん、それはすぐに否定したけれど、・・・でも。

目の前の彼女を見ていると、罪悪感が生まれてこなかった。

「ねえ、本当に哀ちゃん好きな人いないの？」

はつとして顔を上げれば、熱くなったレンジに容器を丁寧に入れた後で、ちよつと不思議そうな表情で私の顔を見ている吉田さんがいた。・・・思わず、目を逸らして、私は答える。

「いない、わ」

「本当に本当に？」

「ええ」

目を伏せて、躊躇いがちに答える私に、一瞬だけ探るように大袈裟に、じいつと見つめ、それからにつこり微笑んだ。

「・・・そっか。じゃあ、もしできたら、私にも教えてね。・・・」

私にできることがあったら、何でも相談にも乗るし、協力するから！」

「え？」

「だって、哀ちゃんは、私にいっぱい相談に乗ってくれたじゃない！今度は私の番だよ！」

明るい表情で笑う彼女を見て、ズキズキと心が痛む。何だか解らないこの痛み。一体何のものが解らないけど。

純粋な彼女をまともに正面から見るのがしばらくは出来なかった。

それから数十分後。2人の作ったケーキは完成して、少年探偵団に上げる手作りチョコも完成して。

「ハイ、どーぞ」

と帰る時に手渡されたのは、いつの間に作ったんだろう。小さなカップケーキ。可愛くラッピングされて、袋に3個、入っていて。

「これを食べれるのは、私と哀ちゃんと、おっきなホールで作ったコナンくんだけだよ？」

と吉田さんは笑った。

12歳の冬。

明後日はバレンタインデー。

彼女の恋が叶いますようにー！。
そう心から願おうとするのに、どこか震えているのは、何故だろう。

1 (後書き)

通いなれた路地をとぼとぼと歩く。もう外は橙色に染まり、日が沈もうかとしている時。

博士の待つ家の前まで来てみたのに、何故かまだ帰りたくなくて、私はとぼとぼと再び元きた場所を引き返した。それから商店街の中に入り、小さな本屋で雑誌を立ち読み。

どこもかしこもバレンタイン特集で。ケーキやクッキーの作り方、美味しいチョコレート専門店、それにバレンタインの夜に出かけるデートスポット。はあ、と溜息をつき、私はそれを閉じ、店を出ようとした、その瞬間。

「・・・っ！」

ドキン、心が跳ね上がった。

「・・・あれ、灰原」

ちようど出ようとした矢先。江戸川くんが逆にちようど今、入店してきた時で。驚いたように自分を見つめていた。学校帰りだったようで、ランドセルを背負い、汚れたサッカーボールを手にとって。

「何してんだ、こんなところで」

「え、あ。・・・ちよ、ちよつと暇だったから、・・・立ち寄っただけよ。・・・あなた、は？」

動揺を隠し、言葉を選びながらゆっくりとごくごく自然を装って顔を背ける。今は顔を合わせたくない。

「いや、ミステリー小説の、新名先生の新聞、一日早く買うこと
できねえかなあって思って来てみたんだけど……。まさかこんな
ところで灰原に会うとは思わなかったな」

「そうね、奇遇ね」

「ああ。てかオメー……。なんだか……」

まるで犬のように、くんくんと小鼻を蠢かせて1歩、2歩と私の
方へ近づき、匂いを嗅ぐ。それから、私の手を掴み、自分の口元ま
で持ってきてさらに。

慌てて私はその手を無理やり振り払った。

「ちよつ、何……」

「いや、別にとつてくわねーけどさ。……。なんだか甘い匂いが
すんなあって……。チョコ？」

「えっ……。!？」

思わず動揺してしまう。私があるわけではないのに、どうして
ここまで過剰に反応してしまったのか、今となってはわからないが。
そのとき、ちょうど彼の視線は、目の前を通った女子中学生の持っ
ている雑誌に目が行く。

『バレンタインデーに作りたいスイーツ30種』

『バレンタインデー近し！ おいしいチョコスイーツの作り方』

「まさかオメー、誰かにチョコ、あげんの？」

「え……。あげるわけ……。ないじゃない」

さらに動揺し、それでもその気持ちを懸命に隠して。
どうして？ そう聞き返そうとしたとき、彼はフツと鼻で笑った。

「だよな。去年もその前も、オメーずっとそうだったもんな。・
・出会って最初のバレンタインのとき、オメーそんなイベントなん
て興味ないわ、みたいなこと言ってたし」

「・・・あら、私は興味ないとは一言も言ってなかったわ。私は
貴方の言う通りだと言っただけよ。のんきに”チョコ、チョコ”恋
愛ごっこをしているのはこの日本だけ・・・ってね。そして、その
前に、『くだらない』とはつきり言っただのは、江戸川くん。あなた
本人よ?」

「え?んなの言ってねえって!」

「・・・本当、自分の言っただことに対してはテキ
トーよね」

「つーか、細かいこと、テメーが覚えすぎなんだつーの!大体
そんな5年前の話」

「あら、それをふっかけてきたのは貴方の方じゃなかったかしら・
・・・?」

「~~~~っ!!もういいっ!!」

顔を真っ赤にさせて、それからふーっ胸の底からの大きな溜息
を一つ。不機嫌になっっている彼の

横顔を見て、私は思わずぷつと噴出した。そうして、そんな自分を
見て、彼は穏やかに微笑んだ。

「・・・博士にもやんないの?」

「フサエさんがいるからいいでしょう。・・・彼にあんまり甘い
ものをあげすぎて体悪くはさせたくないの」

「1年に1回のイベントなんだから」

「それがダメなのよ。あの人、1度にチョコレート1箱、私に隠
れて食べたことのあるのよ。フサエさんにもらって、
私にもらったら、彼、一体どんなことをしでかすか・・・」

「ハハ・・・信用されてないわけだ」

苦笑いをする彼。確かに彼ならやりそうだと想像したに違いない。

「じゃあ、博士にもやらねーってことは、今年も誰にもやらねえってことだ」

「そうよ」

「ずっと?」

「ずっと、って?・・・この先ってこと?」

「そう」

彼の目が自分を捕らえる。まっすぐな蒼い瞳。吸い込まれそうな、黒の中に透明がかった、青。

「・・・さあ、それはわからないわ。心変わりするかもしれないし」

「だよな」

「そうよ」

彼に背を向け、私はバッグを背負いなおし、じゃあ、と片手を上げようとした。

「だったらその時、俺にそのチョコ、くれよな?」

ドキン。

大きく、心臓が1つ、高鳴った。けれど、振り返りもしなかった。振り返る勇気というものがなかったのかもしれない。

「え、何・・・」

「バー口、何動揺してんだよ。義理とか友チヨコとか世話チヨコとかいろいろあんだろ？オメーの作ったの、どんなのか一度食ってみてえんだよな。あ、変な薬とか入れんなよ。したらマジ怒るからな」

キシキシと笑う江戸川くんの声に、私は何故か高鳴る気持ちを抑え、声を振り絞っていた。

「・・・あげないわ、誰にも」

「え？」

「私がそんな柄じゃないこと、あなただって知ってるでしょ。もしあげたしたら、それは本当にたった一人だけ」

「そっか、残念。じゃあさ、そんなときは毒見でもいいからオレに」

「・・・ねえ」

そこでようやく振り返り、思わず彼の言葉を遮った。そうして彼の瞳をこちらから見つめる。彼の言葉を、今はもうあまり聞いていたくもなくて。・・・いや、彼が並べる言葉のおかげで気になって仕方なくなってしまったことを、今すぐ彼の口から、江戸川コナンの口から聞いてみたかったのかもしれない。

「・・・何？」

きょとん、とした表情で彼は訊ねる。

「なんで私のを欲しがるの？バレンタインになったらあなた毎年沢山のチヨコ貰ってるじゃない？あなたのお母さんから、蘭さんからも、吉田さんからも、クラス的女子からも。それから、それ以外のあなたをファンとする全ての子からも。・・・そうしていつも

チョコレートをもてあましてる。甘いものなんて、そもそもあなた
そこまで好きではないはずででしょう？だから沢山のバレンタイン
のプレゼントの山に、もうチョコなんて見たくねえ、なんていつも
零してるじゃない。・・・なのに、なんで・・・？」

「・・・え？そうだよな、あー・・・。何でかな？」

そこまで私に言われて、初めて気づいたようで。彼は不思議そう
な表情をして、それから、暫し考えて。そのあと、まだ合点してい
ない複雑な表情で顔を上げた。

「んー・・・。よくわかんねーけど。特別、なのかなあ」

「え？」

「オメーんだったら、食ってみてえ、って思うんだよ」

ドキン。

今日の彼は、どうしてこんなに動揺することばかり言うのだ。

「オメーらは俺の大切な仲間だからな。俺にしてみればどれだけ
心が込められてても、顔も知らない

誰かが選んだり作ったりするものより、たとえそれが、その人たち
よりも心が込められていなくてもー。ただ、いつも一緒にいて
笑ったりケンカしてたり、冗談を言いあったり。そういう気の知れ
た人たちから貰ったものの方が嬉しいだろ？」

「・・・そうね」

彼が発していく言葉のおかげで、ぽつぽと温かくなった頬は冷え、
自分の高まっていた気持ちは、まるで温度計の水銀が、お湯から冷
たい水に移されたときのように、すうーと急激に下がっていく。
彼の言うことは尤もなことだ。一体何を期待していたのだろっ、
自分は。バカバカしいのにもほどがある。

だから、また自分にもムカムカして。気がつけば彼にその言葉をぶつけていた。

「でもね、ごあいにくさま。あなたにどれだけ言われても、私は今までの彼女たちとは違って、あなたのためには作らないわよ」

冷たく、吐き捨てるようにその言葉を彼に浴びせる。こんな可愛くないセリフ、『最後通告』みたいなことで。

わざわざ彼に言わなくてもいいのに。

案の定、彼はいつものように呆れたような、困ったような表情をして、苦笑した。

「言われなくてもわかってるよ。言ってみたまでだったの。まったく相変わらず冗談のきかねえヤツだなあ、オメーは」

ほら、言われた。

自業自得なのに、胸がみるみるうちにチクチクと痛くなって。思わずさつと俯いた。

そんな自分の気持ちの変化に勿論気づくはずもなく。

ちよっとした間の後で、思い出したように彼は「あ」と呟いた。

「そうそう、今年の歩美のチョコレート、どんなのかな？去年は熊の形だったろ？あれ、結構うめーんだよな。さすがお菓子教室に通っているおばさんと作っただけあるよ」

「・・・そうね」

そこで再び顔を上げ、彼を見つめ、作り笑いをした。

今年はチョコレートケーキよ。あの子が一生懸命貴方のためだけ

に作ったケーキ。

ねえ、工藤くん。貴方はどんな顔をしてそれを食べるのかしら・・・？

「ごめんなさい、私、もう行かなくちゃ。・・・今週は私が夕食当番なの。急いで家帰って作らなくちゃ」

「あー、そつか。うん、じゃあまた明日」

「・・・そうね、明日。・・・小説、買うことができればいいわね」

「うん・・・サンキュな？」

彼と別れ、私は再び博士の待つ家に向かう。

さつきまで綺麗な橙色の空が、もううつすら紺色になっていて、月の色が少しずつ目立ち始めていた。

歩きながら浮かぶのは、今会った、彼の顔と、その前までチョコレートケーキと一緒に作った彼女の顔。

ドクンドクン、と高鳴る心。ズキンズキンと痛む心。その2つの動悸がとっても苦しくて、辛い。

その原因が何度も何度も頭を掠め、けれども、どうしても否定しなくちゃいけない気持ちでいっぱい。

家路に向かう足取りは重く。

ああ。明日からどんな顔をして、2人に会えばいいのかしら？

私はそのことばかりをずっと頭の中で、考えていた。

・・・哀ちゃん、チョコレートケーキの作り方って知ってる？
コナンくんは、食べてもらいたいんだ。

・・・チョコレートケーキ？・・・すごいじゃない。どうして？

・・・私ね、コナンくんは告白しようかと思って。

・・・こく、はく？

・・・うん、もう卒業でしょ・・・中学校に行ったら、もし同じクラスにならなかったら、もう話せる機会が少なくなっちゃうかもしれない。

・・・そんな大袈裟な。

・・・大袈裟じゃないよ。だってクラスが倍になるんだよ？部活だって、授業だって時間が違うんだよ。少年探偵団とかと一緒にいるのより、コナンくんが毛利のおじさんとの推理の方が楽しくて、忙しくなっちゃったら？私は止められないよ・・・だから、一緒にいつでもいられるのは・・・彼女じゃないとダメなの。友達じゃ、ダメなんだよ。

『友達じゃ、ダメなんだよ』

その言葉が大きく響いて、私はずっと目が覚めた。目覚まし時計よりも早い時間。時計を見ると、午前6時18分。12分早く目覚めた私は、大きく溜息をつくとき、すぐに頭を抱えたい気持ちに陥った。

参った。

まさか夢の中で再現されるとは思わなかった。それほど気になっていたことだったのか、寝ているときでも頭は自分を休めさせることをしてくれはしない。

この一件で、私は再度自分の気持ちに気づかされることになってしまった。――というか、気づかないフリをしても、そういうわけにはいかないところまで来てしまった。

こんな気持ち、5年前に置いてきたはずだったのに、まさかまだ残っていたなんて。信じたくない事実。

――私は、『江戸川コナン』が好きなのだ。

私は2度、彼に恋愛感情を持ったというわけだ。

1度目は、江戸川コナンという着ぐるみを着た『工藤新一』に。
そうして、2度目は『江戸川コナン』本人に。

1度目は『工藤くん』の幼馴染のことを考え、今度は『江戸川くん』の幼馴染で、そうして何よりも自分が大切に思う彼女のことを考えて。つくづく彼とは縁がない。

結局『工藤くん』と、幼馴染の彼女とは自分のせいでうまくいくことはなかったから。今度は全力で応援しようと心で誓った。

そう、全力で応援しなくちゃ。

サイドボードに置いてあった携帯電話を手にはやし、溜息をつく。
日付は2月14日。バレンタインデー本番。

彼女にメールをしようかしら、なんて考えていた矢先、思っていた人物からメールが届いて。

私は小さく溜息をついた。

2月14日。小学6年生だというのにクラスは朝からピンク色。

チョコをあげる子もいれば貰う子もいて。

誰にも渡さず、興味ないという女の子もいれば、誰からも貰えず不安に明け暮れている男子もいて。見ていて結構面白い。まあ、自分は誰にも渡さないという部類に入るのだけだ。

吉田さんは朝からちよつと緊張気味で。にっこり笑っているけれど、その笑みはやっぱ引きつっている。

「はい、これ、光彦さんと、元太さんと光彦さんと、それにコナンくん」

いつものように可愛くラッピングされたチョコレートを3人に丁寧に渡す。

クラスの違う円谷くんと小嶋くんは隣の教室から出張してきたのだけれども、その大きな掌にふんわりと乗せられた可愛い包みにキラキラ目を輝かせて。

「今日はお母さんじゃなくて、なんと哀ちゃんと2人で作りましたー!!」

「「おおお」」

吉田さんの言葉に、円谷くんと小嶋くんは、その暑苦しいほどの視線を、私に向けてくる。なんだかちよつと気恥ずかしい。別に私はさほど手伝ってない。そう言おうとしたとき、江戸川くんの視線がこっちに向けられていることに気づき、ドキンと小さく胸が高鳴った。

「な、何？」

「いや、だから一昨日オメーの体からチョコの匂いしたのかって思ってたよ・・・」

合点がいったというような表情で、それから、何で黙ってたんだよ、というような表情で軽く睨まれた。

「別に。提案したのは彼女だし、私はそれに手を貸しただけだから」

「ふうん・・・」

それでもやっぱり不満そうな顔で、けれどもとりあえずは満足だったようで、サンキューな。と持っていたラッピングされた袋を吉田さんに、そうして次に私に感謝の目を向ける。

一瞬、ちよつと嬉しいような恥ずかしいような、そんな感情が芽生えた。自分だけが作ったわけでも

ないのに。なのに、心のどこかがほんわか温かい。けれど、横で頬を染めている吉田さんを見て、

急激に気持ちは下がってしまう。本当に自分は何を考えているのだ、と。

視線を移せば、彼の机の上には既に10個近くのチョコレート。きつと帰りまでにはさらに倍以上のものがもらえるのだろう。

吉田さんは、一体いつあげるのかしら？

そんなことを考えていたら、いつの間にか授業が終わってしまった。気がつけばもうSHRの時間だった。

この数時間、ひとつも授業のことなんて耳に入らなかった・・・なんて、いつも授業を聞いている

わけではないけれど。だから授業に上の空でも、誰も気づくはずもなく。担任すらいつものことかと諦めているようで。それは自分にとって非常に好都合なことなだけだ・・・私はちらり、と斜め前で憂鬱そうに座って黒板を眺めている江戸川くんに視線を移した。

授業が終わり、彼がすつくとランドセルを背負って立ち上がる。そうして、それから何秒か後に吉田さんも。目立たないように、同じようにランドセルと手提げ袋を持って。そうして私の席の脇で立ち止まり、そつと囁く。

「行ってくるね」

「……………ええ。いつてらっしゃい。頑張ってきてね」

「うん、……………ありがとう」

緊張した面持ちで、しかし何とか笑顔を作って微笑み。そうして教室を出ていった。袋からは甘い匂い。

甘くてほろ苦いチョコレートがとってもいい匂いをして、私の鼻腔を掠めていった。

いつまでそうしていただろう。円谷くんも小嶋くんも一緒に帰ろうと誘ってくれたけれど、やっぱり待つてあげたくつて。小嶋くんは解らなかつたようだけれど、2人はちょっと用がある、そう告げた時点で、聡明な円谷くんはすぐに察してくれて、深く追究はせずにさつさと切り上げてくれた。

落ち着かない。

……………落ち着かない。

教室の中を行ったりきたり。席に座ったり、立ったりを繰り返す。最終的にはどうしようもなくて、ロッカーに寄りかかり、そのま
ま床の上で体操座りをして。

膝小僧に頭をつけて、考える。

私はどうしたいのだろう。吉田さんの恋を結ばせてあげたい。

大切な子。悩んだりしているときに、何も自分のことは知っている
はずはないのに、そのときの場面で必ず適切な言葉をかけてくれる
子。周りを明るくさせてくれる子。・・・大事で大事で、仕方なく
で。

そんな彼女がこの5年間、ずっと想いを寄せていた彼。本来なら
手放して応援してあげたいのに。

どうして、こんなに胸が痛いんだろう。

うまくいくことが、心のどこかで怖いんだろう。

・・・なんで、今更。好きになってしまっていることに、気づい
てしまったんだろう。

「どうして」

泣きたくないのに。・・・泣いたら吉田さんに申し訳なくて。思
わず歯を食いしばってたのに。

耐え切れなくなって、一滴、二滴。ぽろりぽろりと膝を濡らした。

「あい・・・ちゃん？」

どきん、大きく再び心臓が跳ね上がり、私は咄嗟に顔を上げて、振り返る。

教室のドアのところにはちよつと驚いた表情で立っていた。

「泣いてた、の？・・・目が濡れてる」

「え」

その言葉でようやく今の状況に気づき、はつとする。が、すぐにポーカーフェイスを作った。

「欠伸。・・・見られちゃったわね」

「ああ、そうだよね。・・・よかった」

心からほつとしたように吉田さんは笑い、私の隣に体操座りをした。反応はどうだったのか。

この顔はうまくいったのか、それとも振られたのか。気になっても訊けなくて。

「ケーキ、渡せたよ？」

「・・・そう。・・・どうだった？」

「喜んで、くれたよ」

一瞬、ズキン、胸が痛む。こんな痛みなんてほしくないのに。

「そう・・・。よかったじゃない」

ぎこちない笑顔になっていないだろうか。うまく言っただけでことなんだ、きつと。

祝福して、あげなくちゃ。

「告白、できなかった」

「え？」

「なーんかさ。ケーキ渡した後で一生懸命気持ちを伝えようとして。胸がいつぱいになっちゃって。

泣きそうになって……。でも、頑張って言おうと思ったんだけど……さ」

「……。コナンくんが、『大切な友達』なんてサラリというから。卒業しても、俺らはぜったい変わらないみたい。そんなことサラリというから。もう言おう言おうとして気持ちが高ぶるんだかもうそこでどうしようもなくなっちゃって。こんな雰囲気の人に、友達じゃダメだよ、コナンくんが一番じゃなきゃダメなの！なんて言ったら嫌われるだけかなあ、なんて短期間の中で思っちゃってさ。そうしたら、言えなくなっちゃって。そのケーキ、コナンくんにはいつもお世話になってるから、特別だよ、みんなで食べてね、って……。なんとか笑って、帰ってきちゃった……。なんか。なあんか、疲れちゃったなあ」

大きく、ううん、と伸びをする。泣いてはいない。だけど、なんだか本当に疲れたという表情で。

あの短い時間の間に何年もの時が流れてたというような、そんな表情をしているから。

そんな彼女を私は横目で見ることでしかできなかった。そうして頭の中に、あの言葉が浮かぶ。

『オメーらは俺の大切な仲間だからさ』

一昨日の、彼の言葉。そんな常套句。決まりきった言葉を誰にも彼にもぶつけているのだろうか、あの男は。

どれだけプレイボーイなんだ、どれだけ人を傷つかせれば気が済むのだ。

思わずかっとなって。私は教室を飛び出していた。

どこにいるのか、わかるはずがないのに、私はただ闇雲に彼を探していた。

探して、彼をひっぱたいてやりたい気持ちでいた。そうやってうまいことを言って、いろんな人
たちを苦しめて。

『大切な仲間』？

『大切な友達』？

『大切なクラスメート』？

『大切なファン』？

そうやって、彼は工藤新一のころから沢山の女の子を泣かせてきたに違いない。

本当は他の女の子なんてどうでもいい。彼がプレイボーイだってどうでもいい。

けど、この言葉で、吉田さんを傷つけてほしくなかった。そうして、その誰にも浴びせるその言葉を、自分にも向けてもらいたくなかった。

吉田さんに向けた言葉か、自分に向けた言葉か。

どっちの言葉の方がより強く今の自分を突き動かしているのだろう。後になって考えても、きっと暫くは答えが出せないものなのかもしれない。

けれど、そのときは何も考えられず。

ただ、闇雲に彼を探して走り続けていた。

図書室、生徒会室、下駄箱、理科室、それから……。

――体育館。

ハアハア、と喘ぎながら体育館の前の扉を開けようとすると、ちょうど女の子がプレゼントを抱えて

出て行くところで。・・・彼女は泣いていて。確か、この子は、Ｃ組の杉浦さんだ。真つ黒なショートカットがとても似合う、可愛らしい女の子。江戸川くんのことを前から気に入っていたというけれど。

・・・まさか。

すれ違った瞬間、ある予感が閃いて。私は急いで体育館に足を踏み入れた。

いた。

体育館の真ん中で、頬を真つ赤に紅くして。・・・くつきり残っているのは、紅色の『手形』

そうしてすぐに察してしまう。ああ、『また』この人は振ったんだ、と。今度は何て言ったんだろう。

『大切な隣のクラスの女の子』、かしら？

「・・・よお。どーした？」

紅くなった片頬を隠すように手で押さえ、彼は少し決まり悪そうな表情でこちらを見た。

「・・・今の子、振ったの？」

「え？ああ」

「なんで？プレゼント持って出たわよ、あの子。・・・他の子からは受け取るけど、あの子からは受け取らないのね。あの子は

他の子と何が違うのかしら？」

やっぱりキツイ物言いになってしまふ。今度はどういふ風に相手を振ったのだ、と。

「え、いや、呼び出されてこーやってプレゼントを渡されるのは、そんな、ねーけど。あとは大勢で

来られたり、クラスの子たちから義理だなんだとか言ってくれたり。今の子には放課後体育館に呼ばれて。来て見たら案の定つきあつて、って言われて。だから、その気はないし、そういう気持ちだったら受け取れないつつたら、ひっぱたかれた。・・・たく、女はこえーよな・・・そういうヤツばかりでもねーのはわかってるんだけどな・・・」

おー痛で、と叩かれた頬を摩りながら、彼は媚びたように笑う。そうか、だからか。・・・ようやく合点が言った。そうしてみるみるうちに哀しくなつて。

「めんどくさい？」

「・・・は？」

「そーやって、告白されるのがめんどくさい？だから逃げたの？告白される前に、あの子たちから」

「は？あの子『たち』って誰だよ？」

「吉田さんよ。・・・そうして同じ常套句を使って振った女の子たち」

「は？振った！？ちょ、待てよ！一体どれがどーなってそんな話になってんだよ！」

焦ったように彼が声を張り上げる。

「だって、言ったじゃない。彼女に、『大切な友達』って……。知ってたんでしょ？あの子が自分のことをどう思っていたか……。何を、したかったか」

知らないなんて、言わせないわよ。

彼は知ってたじゃないか。小学1年生のときから、彼女の気持ちを。そうして、いつも。

『逃げてきた』じゃないか。受け止められずに、逃げてきた。

私の言葉に、一瞬彼がハツとして、それから嘆息ついて、作り笑いをした。

「なんだ、歩美に聞いたのか？」

「ええ。『大切な友達』って言ったんでしょ。告白するってわかってたから、逃げたんでしょ？」

「ああ。そうだな、わかってた。……。今の俺には、俺はあいつのことを『彼女』にするって気持ちは全然ねーから。……。先のこととはわかんねーけどさ。……。でも、失いたくなかった。……。言っただろ？一昨日も。あいつらは俺のかけがえのない『大切な仲間』『大切な友達』なんだからって」

ドキリ。

一昨日の彼の言葉が頭を過ぎる。

「あいつの気持ちを聞いた後で、俺のそんな気持ちを伝えたところで逆にあいつを苦しめるだけだ。

告白されて友達でいましょう、なんてそれでハイそうですか、なんてうまく行くわけねえ。それがわかってるから。

……。言えなかったんだよ。そのあとさこちなくなるのがイヤだ

ったから」

どうしてだろう。

あんなに彼を責めていた気持ちがいつのまにか薄くなって。納得しないわけにはいなくなっていた。

「じゃあ、本音だったの？」

「え？」

「一昨日の、『大切な仲間』とか、今日の『大切な友達』とか」「当たり前じゃん。何？ウソに聴こえたの？」

「ウソっていうか……。予防線にみんなに使ってたわけじゃなかったの？」

「……。は？イマイチ意味わかんねーんだけど。……。使ってるわけねーじゃねーか。何でいちいちそんな思ってもねえことみんなに言わなきゃいけないんだよ、めんどくせえ」

心底嫌そうに顔を顰めて、彼が答える。

「まあさ。……。歩美んときは予防線っちゃ予防線の部類に入ってたかもしれないけどさ。でも間違はなく本音だったし。……。つか大体オメー、俺と一昨日、そんな雰囲気になったこと一度でもあったっけ？」

「~~~~っ！！！」

思わずムカツとして私はいつのまにか手に持っていたタオルを彼の顔面目掛けて投げる。

「うわ！何だよ！」

突然の反撃に多少ビックリして、彼はそのタオルを受け取ろうと

手を伸ばす。そうして彼が受け取るのを見え、そのまま背中を向けて、私は吉田さんのまだ待っているかもしれない教室へと歩き出した。

「・・・なあ、灰原」

「・・・なに」

ポツリ、彼が言うから。

私は足を止めた。振り返ることはしなかったけど。彼が何を言いつ出すのか、大体のことはわかっていたから。

「・・・あいつ、泣いてたか？」

「泣いてないわよ。・・・相当、疲れてたけど・・・でも、あの子ならきつとあなたの気持ち、すぐにわかってくれるんじゃない？」

「・・・そつか。・・・だったらいいな」

「そうなるわよ、きつと」

「そか、そーだよな」

しんみり独り言を言う彼を残して、私は再び歩き出した。

教室にまだ吉田さんはいるだろうか。・・・いないかもしれないでも、きつとわかってくれる。

明日には笑ってみんなに『おはよう』と振りまいてくれる。・・・そんな気がしてならなかった。

教室に戻ると、吉田さんがにつこり笑って待っていたから、驚いた。

席に戻って、一人ぼんやり座っていて。私が来たたん、につこり嬉しそうに微笑んで。

もうあれから20分以上経っていたというのに。そうして、今は一人でいただろう、そう思っていたのに。

「おかえり」

「・・・ただいま。ごめんなさい、急に飛び出しちゃったから。・・・心配した？」

「うん、・・・ありがとう、ね」

「え？」

その『ありがとう』の意味を理解できずに一瞬戸惑ってしまい、それから確かめるように彼女を二度見した。心配させないようにとわざと笑顔を作っているのか、それとも、何かこの数十分の間に彼女の心境の変化があったのか。捉えることが難しい。私は彼女が次に言う言葉を待っていた。

「体育館、私も行ったんだ。泣きながら、コナンの悪口を言う女の子の声が聞こえて。思わず聞き耳たてたら、C組の杉浦さんで。体育館でフラれて。・・・B組の灰原さんに泣いてるところ見られたとかそんなことを聞いたから、急いで行ったら、ちょうど哀ちゃんがコナンのことすごい勢いで怒ってて」

「・・・っ！」

「コナンの気持ちも聞いてちゃった。・・・あーあ、やっぱり気づかれてたか。・・・ちょっと、ううん。・・・かなり恥ずかしいよ」

ぺろつと可愛らしく舌を出してみせて、吉田さんは笑ってみせた。強がっていないだろうか。吉田さんの様子をどうしても窺ってしまっ

嫌いとも言っていない。

興味もないとも言っていない。

かけがえのない大切な『友達』『仲間』とも言ってくれていた。

だけど、彼はこうも言っていた。

『今の俺には、あいつを『彼女』にする気持ちは全然ない』
それを聞いてしまったとしたら、一体どう思うだろう？

「ねえ、哀ちゃん。あたしさ、絶対綺麗になってやるんだ！」
「え？」

一瞬のうちに我に返ると、吉田さんはにこにこ、満面の笑みで笑っていた。

「コナンくん、先のことはわかんないって言ってたでしょ。だから・・・未来に、彼が好きになってくれるように。彼女として考えてくれるように。・・・中学校に行っても、絶対他の女の子に目移りしないように、私頑張る！ね、目指せ、いい女！」

だもんね！……だから哀ちゃんも、一緒に協力してね！」

「え？」

「ね、哀ちゃん」

可愛らしくウインクする吉田さんに、そのパワーに、私は「え、ええ」と何とか言うしかなくて。

それに満足したように吉田さんは再びにつこり頷いた。

そうしてすつくと元気よく立ち上がり、バッグを持って1歩2歩と、歩き出す。

「さ！帰ろう！なんだかお腹すいちゃったー！」

気がつけば時刻はもうすぐ17時。ほんの数十分前まで緊張でいっぱいだった彼女の顔は呆れるくらいにもうすつきりしている。あつけらかんにそう吉田さんが言うから、私は心の底から安心した。もう、大丈夫だ。だから私は『いつもの』私に戻ることに心がけよう。まだまだ切り替えが難しいかもしれないけれど。

「ミスド寄ってこうよ！」

「……寄り道禁止よ……」

「えー、いいじゃない。ちよつと語ろうよ！ドーナツとか買って、ね、いいでしょ、哀ちゃん！」

「……さつそく太るわよ……」

「うつ……。哀ちゃんのイジワル。傷心の乙女を傷つけて何が楽しいの……？」

涙目になった吉田さんを残して、私は素知らぬ顔を決め込んで、教室を出る。

もちろん、その涙目は『ニセモノ』だとはわかっているから。

「もー！哀ちゃん！」

知らぬふり。

「哀ちゃんてば！」

沈黙。

「・・・哀ちゃん！」

・・・。

「哀ちゃん、大好き！！」

ぎよつとして振り返ると、吉田さんはいつのまにか走って近寄ってきて、ぎゅつと後ろから抱きつかれ、
極めつけは耳元で。彼女はそつと囁いた。

「・・・HAPPY Valentine's Day・・・
これからも、よろしくね！」

<FIN>

4（後書き）

今回は哀ちゃんと歩美ちゃんの話になりました。

いつも、中学生コ哀で、付き合ってたたり、そうじゃなくてもお互い好きあつてたり、とか。そんな感じだったので、今回はそういう話のもっと前。お互い、まだ自分の気持ちに気づいていなかったり、気づき始めたり、とかそういう次元の話を書きたくて書いてました。

哀ちゃんやコナンくんの傍にいつもいる歩美ちゃん。小学校のころから彼に想いを寄せていた女の子。私の描く中学生コ哀では、いつも歩美ちゃんは2人の恋を応援しています。コナンくんが誰に気持ちが行っているか、ちゃんとかわかっていきます。小学生のとき、コナンくんが蘭おねーさんを好きだったのをちゃんと知っていたのと同じように、彼が今の時点で誰を好きなのかも。そんないつも健気な彼女を今回はちゃんと告白させてあげたくて……。

でも、結果は成就させるわけには私的にはいかなかったの。（注：コ哀推奨・笑）　そうして、コ哀な話もちよこつと取り入れたかったの（注：コ哀推奨・笑）こんな形になっちゃいました。いかがだったでしょうか。

ここまで読んでいただいて、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5909/>

ほろにがバレンタイン。

2010年10月13日16時29分発行